

# 地域の歴史と誇りを紡ぐ 伊達のニット

全国でも有数の生産シェアを誇る伊達市のニット。その歴史は一朝一夕で成り立ったものではありません。ニットにまつわる歴史や、製品に込められた作り手の思い。それらは地域に受け継がれてきた誇りなのではないでしょうか。



## 伊達ニットの歴史

伊達市はニットの産地として、どのように発展したのでしょうか。その背景や伊達ニットの特徴、そして、伊達ニットのこれからについて、福島県ニット工業組合理事長の三品清重郎さんにお聞きしました。

### 養蚕業で培ったもの

戦後、伊達地方はニットの産地として発展していきませんが、その背景には養蚕業があります。養蚕業を通じて、地元には繊維・衣料産業の技術やノウハウが蓄積されていきました。

昭和20年代後半ごろ、ニット産業の中心は東京と大阪でした。やがて経済の発展に伴い、生産の拠点は地方へと移っていきます。

福島県は、都市部の企業の福島工場というような形で発展を遂げていきました。しかし、伊達地方では、ニット産業に将来性を見出

した地元の人々が起業した例が少なくありません。やはり、養蚕業で培われたものが伊達地方のニット産業の土壌になったのではないのでしょうか。

### ニットが地域をつないだ

伊達地方のニット産業には、大きな特徴がありました。それは、製造工程の全体がひとつの地域に集約されていたことです。

糸の製造から製品への加工がひとつの地域で行われており、地域全体がニット産業に携わっていました。それぞれの分野がネットワークでつながり、ニットを通じて地域と人が結びついていました。

### 伊達ニットの特徴とは

伊達地方のニット産業のもうひとつの特徴は「バルキー糸」という太めの糸の産地だったことです。この糸を使って、ケーブル編みやダイヤ編みなどを用いた

「伊達市でさかんな産業は何ですか」

「こう問いかけられたとき、多くの人が農業と答えるのではないのでしょうか。」

確かに、伊達市ではおいしい農産物を数多く生産しています。しかし、忘れてはならない産業がまだまだあります。そのひとつがニット産業です。

かつては「お蚕どころ」として栄えた信達地方。この地で発展した養蚕業は繊維・衣料産業の土台となり、戦後はニット産業の産地として形成されていきました。

した。

しかし、昭和末期ごろから海外生産の製品が増加し、近年では事業所数の減少など厳しい状況にあります。そのような状況でも、長年にわたって蓄積された高度な技術によって、高品質な製品づくりが現在でも続けられています。

伊達市のニット産業は、地域の歴史を今日まで受け継いできました。そして、製品には作り手の思いが込められています。その歴史や作り手の思いに触れてみませんか。

平成30年2月、伊達市は  
ニット製品のふるさと名物応援宣言  
を行いました



ふるさと名物応援宣言とは

「ふるさと名物」(地域資源を活用した商品・サービス)を特定し、地域を挙げて応援するものです。

地域ブランドの育成と強化を図り、地域の売上や雇用の増大、地域経済の好循環につなげるため、「ふるさと名物」として応援することを市町村が宣言します。



福島県ニット工業組合理事長 三品 清重郎さん

製品づくりを得意としました。

太い糸は糸をより合わせる力が強く、「意匠糸」(素材や太さ、色が異なる糸をより合わせるなど、装飾性を高めた糸)を使って、デザイン性の高い生地を生産しており、生地や柄の美しさに定評がありました。

### これからの伊達ニット

製造技術が発達した現在では、製品や技術に地域性を見出すことは難しくなりました。今は大量生産のニット製品が安価で、どこ

でも買える時代です。伊達地方で生産する製品とは価格差がありますから、消費者が価値を見出せる製品でなければいけません。

OEM(※)生産も必要ですが、独自性はなかなか出しにくいものです。伊達のニットの価値をさらに高めるためには、独自性を持った製品づくりが重要になってくると思います。また、「伊達産」であることをさらにアピールし、製品と地域の両方のイメージを高めていきたいと考えています。

※ OEM : Original Equipment Manufacturer の略語。他社ブランドの製品を製造すること

# 作り手の **思**い

伊達市に大きな被害をもたらした、昨年10月の台風19号。丸幸ニット（梁川地域）は甚大な浸水被害を受けながらも、ニットづくりの道を再び歩んでいます。代表取締役社長の藤倉奈々子さんにお話を伺いました。



株式会社 丸幸ニット  
代表取締役社長 藤倉 奈々子さん

**工**場の被害状況を確認できたのは、台風の翌々日のことでした。最初に見たときは、「一言「どうしよう…」とつぶやきました。あとは「とにかく片付けないで」という気持ちだけでした。社員も同じ気持ちで、自宅が被災したにも関わらず、会社の片づけに参加してくれた社員もいました。

取引先から「遅れてもいいから納品してほしい」という言葉をいただき、ニットづくりの先には、商品を手取ることを楽しみにし

ている人たちがいることを改めて実感しました。電気が使えない中、手作業や手動の機械を使って製造する場面もありました。

何人も人の苦労や思い入れがあって、現在まで続いてきた会社を無くすわけにはいかないという気持ちが強くなりました。自分だけでは、きつとどうにもできなかつたと思います。社員みんなが懸命にニットづくりに取り組んでくれたので、このまま終わらしたくありませんでした。

梁川は、古くはお蚕どころとして知られ、ものづくりで栄えてきた地域です。ニット産業が少しずつ減っていきさびしい気持ちはありますが、だからこそ残していきたいと思っています。幸い、高い技術をもったベテラン社員も、「ニットを編むのが好き」と言ってくれる若い社員もいるので、これからも前に向かって進んでいきたいです。

# 作り手の **こ**だわり

オリジナルニットのブランド化に取り組んでいる阿部ニット（月舘地域）の製造現場にお邪魔しました。



希少な機械で編み上げる

国産の編み機が多くのシェアを占める中、ドイツの「ストール社」の編み機を導入しています。



←高密度で美しい編み目



高密度で、美しい編み目になる

「両畦編<sup>りょうせあみ</sup>」という編立技術により、編み目が美しく、目が詰まった状態になります。もちろん、機械があればこの生地をつくれるわけではありません。編む糸や素材によって細かに調整し、高い品質を維持しながら生産性を高めるために編み方の追及を続けているそうです。



株式会社 阿部ニット  
代表取締役社長 阿部 義己<sup>よしき</sup>さん

## 流行を追わない製品を常につくりたい

シーズンが終わると、店舗やブランドを通して、製品に対する市場の評価が伝わってきます。その声を次の製品づくりに反映し、改良を重ねています。

ファッション業界は1年か2年で流行が移っていきます。それでも、「流行を追わないもの」を常につくりたいと思っています。長く使えて、着る人に愛着を持ってもらえるものをつくっていききたいですね。



L'ANIT (ラニット)  
あやみ  
高橋 彩水さん

**伊**達市のニット工場に入ったとき、製品づくりの技術の高さに驚きました。同時に、地方の弱点と言われてきたデザインなどで、地域で連携してやっていけないかと考えるようになりました。

## Next Generation 地域の連携で 伊達ニットを身近なものに

伊達でニットづくりを学び、自らのブランドを立ち上げた、ニットファッションデザイナーの高橋彩水さんにお話を伺いました。

ただ製品をつくって売るだけではなく、ニット製品ができるまでのストーリー、地域の人たちの活動も交えて発信したいと考えています。伊達の真綿で糸を作ったり、見知らぬ老若男女が入り混じってニットに触れる交流会を開いたり、地域と人とニットをつなぐ活動をしています。

多様な考え方の人が出会うことで新たな価値観が生まれ、動きが出ると思います。常に新しさを求めるファッション業界へのアピールにも、製品づくりに取り組む人の刺激にもなり、ひいてはニット産業全体を高めていけたらと思います。

## 伊達ニットを PR!

### ニット議会

12月に行われる議会定例会を「ニット議会」とし、市長をはじめ市の執行部、市議会議員全員がニットカーディガンを着用し、伊達市のニット製品をPRします。



### ふるさと納税

ふるさと納税の返礼品として、ニット製品を取り扱っています。ストールやバッグ、ニットタイなどをラインナップ。



### ニットフェア

福島県ニット工業組合によるイベント。伊達市内や県内の展示会場などで開催し、高品質な製品を製造元直売価格で販売します。